
具体的な子ども支援とは何かを考える

— S S Wとの連携を通して —

兵庫県宝塚市立高司小学校

特別支援教育コーディネーター 島谷 恵子

1. はじめに

本校は、宝塚市の南部に位置し、330余名の児童が通う小規模校である。保護者は本校出身者が多く、学校運営に協力的である一方、日々の生活に追われ、子どもを愛しているながらも、時間的・金銭的・心理的に教育を最優先にできないジレンマを抱えている家庭が少なくない。

そうした背景を抱えながら登校してくる子ども達は人懐っこく元気である反面、課題を指摘されても素直になれず「どうせムリやし」などと投げやりな態度をとったり、友と自分との違いに過敏に反応して攻撃したり、またそうしたイラ立ちを、反撃してこない子にぶつけたりしていた。こうしたことから、本校では以前より「全教員が同じことを指導しよう。一人で抱え込まず、チームで子どもを育てよう」を合言葉にしている。

そうした中、S S Wが派遣されたことをきっかけに、本校では以前からおこなってきたチーム支援を見直し、より具体化した。全職員で課題を共有し、チーム支援をより強固なものとして、子どもや保護者と連携を深めていけるよう、コーディネーターとしてS S Wと連携を図りながら、取り組みを進めている。

2. チーム支援を変える

前述のように、本校では事案が起きると生活指導担当を中心に、チームで対応することを徹底している。しかし以前のチーム支援と、今のチーム支援とでは、想いは同じでも関わり方が大きく変わってきた。

①校内体制を変える

本校には、研究推進委員会・生活指導部会・特別支援教育委員会・人権同和部会という常時委員会がある。以前は、何か事案が起これば、生活指導部会が主に対応していた。起きる事案数が多いので、生活指導担当や気になる児童の担任は、どうしても多くの時間を指導に費やさざるを得なかった。特に、

本人指導・保護者面談は、する側・される側双方にとって気分が重い上、事実の聞き取りと照合・反省だけでもかなりの時間がかかった。また、気になる児童は、生活面・発達面・家庭環境面など複数の課題を抱えていることが多いので、同一児童や保護者が、短期間に何度も繰り返して指導を受ける状況があり、互いこうんざり…といった場面もあった。

そこで校内支援委員会を新たに設置した。この会は、各教師の気付きから様々な課題を併せ持つ子の様子について総合的に情報を共有し、話し合う会である。この会のメンバーには管理職の他に、生活指導部会・特別支援教育委員会・人権同和部会の主任者も入っているため、各部会で出た情報や教師の気付きが一か所に集約される利点がある。各部会からの情報と、各クラス担任・専科担任が毎月パソコンに入力している『子どもの様子』、S S Wが児童館や学童保育などから得た情報がまとめられ、会の資料となる。子どもに関する多くの情報が集まる中、どのケースに優先して関わるか、どのように連携すれば良いか、S S Wのアドバイスを受けながら、学校が今後の支援の方向性を決めるようにした。このような情報掌握の体制に変えたことで、子どもを捉えたり、今後の支援を検討したりすることが、総合的におこなえるようになった。

②ケース会を変える

ケース会は必要に応じて開かれていたが、以前は、情報を共有することに重点が置かれていた。そのため、担任の話を「大変だね」「よく頑張っているよ」と労い励まして終わることが多く、児童や家庭・担任が抱える悩みや課題の解決までには至らないことが多かった。他機関との連携ケース会では、その傾向がより顕著で、学校は把握している内容を伝え、他機関もそれぞれの情報を出して終わる印象が強く、時間をかけてケース会をおこなっても状況が変わらないので、かえって担任をしんどくさせてしま

う側面もあった。

そこで、ケース会をひらく目的を明確にするようにした。まず情報を共有して、なぜその状態が起きているのか“見立て”をし、その具体的な手立てを考えることを中心におこなうよう、心がけた。その結果として、「誰が」「何を」「いつまでにおこなうか」という計画もスモールステップで決定し、次のケース会では、その計画がどうだったのか、振り返ることにした。

ケース会に参加するメンバーも、以前は教師だけ、または外部関係機関と学校関係者だけだったが、今はそうした会に加えて、保護者や本人と会を持ったり、中学校と会を持つなど、ケース会に参加するメンバーが多様になった。特に最近では、そうした場に、キーパーソンであると思われる学童保育職員が参加することも増えてきている。

ケース会で対象とするのは、特定の個人や家族ばかりではない。クラスや学年というように、集団について検討するようになった。集団についてのケース会では、子ども同士の関係性や相互作用を見立てたり、教師とそれぞれの子どもの距離感などを分析し、どこにアプローチしたら、担任が思い描く学級経営に近づけるのか考えるようにした。

このように、ケース会では、本人や保護者・担任の悩みを見立てて整理し、アプローチの価値づけや修正をおこなった上で、今必要と考えられる働きかけを焦点化するようにした。そうすることで、関わっている者が見通しを持てるようになり、状況を捉える視点に変化が生じた。また“見立て”することで、起こり得る課題を事前に想定し、それに対する対応ができるようになった。

こうした予備対応・早期対応が増えたことで、有事の対応が減り、生活指導担当者や担任の放課後指導に割く時間が各段に減った。さらにはケース会を通じて“元気になる人”が増え、本人や保護者本人から、情報（相談）があがってくるようになった。保護者とのケース会を通して、学校と保護者は子どもの成長を“一緒に”考え協力して育てる関係なのだ実感してもらえるようになったことも、大きな変化である。

③中学校との連携方法を変える

どこの小・中学校でもおこなわれている卒業時の申し送りだが、以前は、気になる児童についても口

頭での申し送りのみだった。中学校も、おそらく新年度1年生を受け持つであろう卒業学年の先生が申し送りの会に参加するが、小学校からの情報が中学校全体へ共有され難い現状が多くあり、実際に4月から学年がスタートした時には、申し送った内容を知っている先生がいないということも、少なくなかった。

そこで、気になる児童については書類で申し送るようにした。書式を統一し、子どもの学習・生活・友達関係・家庭などの情報を、担任と一緒にまとめた。申し送るポイントとして重視しているのは、「こんなに大変な子です」ということではなく、「そうした実態にどのように支援してきたか」という“手立て”の共有であり、子ども達へのよい関わりが途切れることのないよう、心がけている。過去には、小学校の準備した書類に個人情報が多く記載されているため、機密書類として一年間金庫に保管され、全く活用されていなかった年もあったため、申し送りを中学校でおこなうようにした。できるだけ多くの先生に情報を聞いて頂くと同時に、内容を活用できるように、具体的エピソードを申し送るようにも努めた。

また、保護者とケース会を開いて申し送る内容を確認したり、希望があれば事前に中学校を見学させてもらい中学校生活の様子を聞いたりして、入学後の生活がスムーズにスタートできるようにもしている。

さらに夏には、小・中合同ケース会を開催して、申し送った児童の中学校での様子を共有し、中学校で生じた課題への対策を一緒に考えている。本校児童が進学する中学校には、他から2つの小学校も進学してくる。申し送りは、各小学校別々におこなったが、夏の合同ケース会では全小学校一緒に話を聞くようにしている。知らない子の話も一緒に聞くことになるが、中学校での子ども同士の関係性を知ることで、卒業生の様子が詳細に分かり、卒業生やその兄弟を理解する一助になっている。ここで意見交流することをきっかけに、中学校との連携が具体的かつタイムリーに進められるようになった。

3. SSWの特性を活かした支援

①福祉の視点を持ったアプローチ

子どもの様子を見ていくと、保護者の就労や収入・

病気など、学校が介入しきれない課題にぶつかることがある。しかし学校は、具体的な手立てやケースを知らないため、どこまで介入しているのか分からない上、介入することで事態が悪化しては困るので、「注意深く児童を観察し、気になることがあればこまめに情報を共有し合おう」と確認して終わっていたのが、これまでだった。そのため、例えばネグレクト傾向にあると情報を得た子どもの担任は、「気になることって、どういうことを報告すれば良いのか」「自分の感覚が鈍く、気付かなくてはいけない情報を見逃していたら、どうしよう」と不安に感じている声をよく耳にした。

しかし、市の支援制度などにも精通しているSSWがチームに参加してからは、学校が介入しきれない家庭や保護者の課題が分かった場合でも、どの福祉制度が利用できるかといった提案をしたり、その具体的な手続き方法の案内・付き添いなど、保護者の困り感に具体的に関わってもらえるようになった。生活環境が整ったことで保護者に余裕ができ、子どものことを真剣に考えられるようになったり、学校に信頼を寄せて、これまで話せなかった事情を打ち明けて下さるようになった事案は、何例もある。口コミで相談のことを知り、保護者から話をしたいと相談に来られるケースも増えた。

②早期に繋がる工夫

SSWを『環境調整のプロ』と捉えている本校では、子どもにとって大きな環境の変化時には、保護者をSSW面談につなぐことにしている。

まず入学時には、必ずSSWの存在を保護者に知らせ、新生児の保護者を対象とした『拡大子育て相談会』を懇談会に合わせて開いている。

転入生にはリーフレットを渡して直接説明し、SSWとの面談をおこなっている。保護者にとっては「新しい環境で知人も土地勘もない中、相談相手ができただけは、大きかった」と好評だ。その大きな要因の1つに、転居（転校）理由そのものに、経済的・精神的保護者の困り感が含まれていることが少なくないため、前述のような福祉的アプローチができるSSWと早期に繋がることで、迅速な対応ができることがある。これは、教師やカウンセラーにはできない保護者フォローであり、SSWという専門家と共同してチームでかかわる利点であると感じている。

SSWは、他機関と学校の連携も調整している。子ども家庭センターや家庭児童相談室など他機関と連携することがあっても、以前はそれらの機関がどのように動くか理解できていなかった上、ピンポイントな連絡しか取り合わないのでは動きが見えにくかったり、それぞれの専門的視点でケースを捉えるため、ケースの動かし方にズレが生じたりすることがあった。

しかし、様々なケースを他機関と連携しているSSWが、それぞれの働きの狙いを説明してくれたり、互いの動きを連絡し合い、どこでズレが生じているのか見極めて、ズレがなくなるように動いてくれたりするので、互いに連携している認識がより一層強くなった。

4. 具体的な支援のため、大切にしていること

子ども達へ支援が届くよう、校内体制・状況把握の方法・ケース会の内容・連携の仕方を改善し、SSWと連携してケースに対応してきた。その中でも、近年特に大切にしていることは、次の2点である。

①見立てを大切にす

気になる児童について、これまでは気になる言動の実態交流が主に行われてきた。しかし、それだけではなかなか課題解決には至らないし、関わる者も子どもも事態が好転しないことに疲れるだけである。そこで、ケース会を用いて、「なぜ、そういう言動をしているのか」という“見立て”を丁寧におこなうことを心がけている。ややもすると、本人の性格や不安定な家庭環境だけに原因を求める場合が多かったが、しっかり見立てをすることで、発達の視点でも子どもを見ることができるようになってきた。もちろん、多くのケースにおいて、気になる言動の要因は複雑で、1つとは言い切れない。ただ、発達の視点も含めると、自然と保護者の関わりづらさが見えてきたり、一見反抗的に見える言動でさえ、本当に分かりづらいのだということが理解できたりもする。早期介入することで、発達の課題をこじらせずにすむことから、できるだけ低学年の時から支援がスタートできるようにしている。

例えば、Aさんは低学年の頃から落ち着きと集中力がなかった。担任はその都度、母に実態を告げていた。母は本人の実態を分かっているが、どうして良いか分からないし、「父の本人理解が難しいので」

と、当初はなかなか具体的な支援が進まなかった。そんな中でも母と面談を重ねる中で、自己抑制力に欠け、中学生とトラブルを起こしたり、危険行為がなかなか止まないのは、発達の課題が背景にあるのではないかと見立てられたので発達検査を受け、その結果に基づいて学習や行動支援をした。発達検査という客観的なデータは父の理解を促すのに大きく役立ち、その後、父もケース会に参加するようになった。そこでの見立てをもとに、医療機関も紹介した。時々起こる保護者の揺れ（家族の無理解・受診や服薬についてなど）については、その都度丁寧に話を聞いたり、ケース会を重ねた。SSWには一緒に病院受診をしてもらい、服薬治療をスタートすることで、本人も落ち着いて学校生活を送ることができるようになった。両親の子ども理解が増すと比例するように、本人の状態も落ち着いていった。

②本人による自分理解を大切にす

子どもは成長するに従い「自分とは」を問い始めるが、配慮すべき背景を抱える気になる子どもは、そうした背景ゆえ正しく自分を評価しづらいという共通点がある。

これまでは、大人（教師や保護者）が話し合いをし、何とか本人が学んだり生活したりしやすいような環境づくりに努めてきたが、やはり全ての状況を網羅することは困難で、本人も自分の強味・弱味を知り、特に弱味に対しての手立てが取れるようにすることの重要性を感じるようになった。

そこで、本人ケース会で課題や本人が頑張りたいと考えていることを共通認識し、がんばりカードを中心に、どれだけ目標が達成できているか評価したり振り返るようにしている。また、高学年になると「なぜ自分は、他の子のようにできないのか」と自責の思いを抱くようになる子もいるので、自分理解BOOKを作成して、自分理解に繋げている。

例えばBさんは、入学直後からトラブルが多く、その都度保護者と面談を丁寧に重ね、課題共有をしてきた。発達検査もおこなったが、本人が状況を何でも否定的・被害的に捉えてしまうことや、その結果からトラブルを起こし

てしまう状況は、続いた。そこで、発達検査の結果も取り入れた本人理解BOOKを本人と担任で作



成し、「自分は、早とちりしやすいから、『もしかしたら』を口癖にする」など具体的にルールを決めた。このBOOKは、本人にとって「あれを見たら、良い方法が分かる」と本人にも安心できるものになり、普段は担任が保管しているが、何か起きそうになった時は「ちょっと見せてください」と、BOOKを見にきてトラブルを減らせるよう本人なりに努力している姿が見られるようになった。

5. おわりに

SSWの配置をきっかけに、私たちのチーム支援は“何かあった時”迅速に連携して対応するチームから、“気付き（何か起きる前）の段階から”迅速に連携して対応するチームに変わった。

コーディネーターとして意識したのは、具体的な見方・取り組みを通して、変化を実感できる支援づくりだ。具体的な支援で子どもや保護者が変わったことを実感できると、支援される側はもちろん、支援する側も元気になれる。

その支援を実現するために、「子どものために、まず動く」をモットーとし、職員や保護者からも信頼の厚い校長先生が、的確なアドバイスをしながらコーディネーターの働きを全面的にサポートしてくださったことは、何より大きい。そして、SSWが専門的知識を用いつつ、他機関との繋がり方を上手に学校現場に取り入れる調整を一緒にしてくださったこと、「できることは何でもする」という前向きで協力的な教職員がいたことが、本校の支援を具体的なものに変えた。

今後は、こうした支援を継続していけるよう、子どもや状況の捉え方・見立て方などを、誰もができるようにしていく必要がある。「〇〇先生がいるから、できる支援」では、結局、子どもに返っていかないからだ。市内合同研修会などで模擬ケース会をする際、本校教師が「捉える視点が多角的で、自然と会をリードしていた」と聞くと、日々おこなっているケース会などの取り組みが、自然と先生方の力として定着しているのかなと嬉しくなる。教育のプロであると言われる教師一人ひとりが、気になる子どもや家庭支援を捉える視点・アプローチスキルをきちんと身につけ、しっかり対応できるようにこれからもしていきたい、との思いを強くしている。